

# 明石の御方の町に池はあつたか

—『源氏物語』六条院冬の町想定配置図私案—

加藤伸江

## はじめに

『源氏物語』の六条院冬の町は、明石の御方が住む町である。本文には冬の町における池の描写がない。そのため、先行論には池がないとされているものが多い。しかし、池の本文描写がないという理由で以って、池がない町であると、はたして決めつけてよいものだろうか。

平安時代の邸宅の池の有無については、平安京の庭の遺構を参考にすると、「右京一条三坊九町」のように、池を持たない事例もある<sup>1)</sup>。が、左京三条二坊十町の堀河院推定地には、池の遺構が確認されているという<sup>2)</sup>。池の有無は、邸宅の規模や用途によって異なり、また自然地形に左右されるもので、一概に言える事項ではないという。

それでは、『源氏物語』六条院冬の町の場合は、池の有無をどう

想定すればよいだろうか。『源氏物語』成立時に近い読者は、明石の御方の住む町の姿をどのように想像し共有していたのであろうか。

本論では、まず、冬の町の池の有無について探る。根拠とするのは、『源氏物語』本文であり、和歌や他の物語も参考とする。次に、その考察結果に基づき、池に関わる建物の配置を検討する。そして、六条院冬の町の想定配置図私案を作成したい。

## 一 冬の町の池の有無についての先行論

六条院冬の町の池の有無について、これまでの先行論を挙げる<sup>3)</sup>。外山英策氏は、大堰邸の冬の景との重複を避けたと述べ、冬の町の池の有無については言及してはおられない<sup>4)</sup>。

明石上の戌亥の町の冬の庭に就いては、少女の巻に記せるのみで、他には見えない。初音の巻に、源氏と明石上との間に

来し姫君の為に、童下仕などが御前の山にて、小松曳きをなせしことを記し、野分の巻には童下仕などが明石上の心止めて取分け植ゑし龍膽りんだうや朝顔の散り亂れたるを繕ひ居る様を記して居るばかりである。これは明石上の大井河畔邸の冬の様を力を極めて書き記せし故、重複を避けたのであろう。

太田静六氏は、枯山水の庭であるとして、冬の町の池はないものとしておられる。

この町には南山や南池は設けられなかったと思われるが、一方、ここが冬の町であることなどから考えると、この庭園は池や花木を配した普通のそれとは相違して、いわゆる枯山水で装われたと私考される。『源氏物語』から少し遅れて平安盛期末に著された我が国における最古の庭園書の『作庭記』には既に枯山水の記事がみえるので、六条院にも池や遣水などのない枯山水式の庭園があってもよいわけである。

目加田さくを氏と福岡女子大学国文学科三年の作成した想定図にも、池はないとされている。

池の描写はまったくないので遣水だけを通した。ふつつ寝殿造りの庭園としては池がなければならぬが、この町のつくりは、寝殿がなく略式であり、土地が狭いことから考えて、池はない方がよいのではなからうか。

玉上琢彌氏、池浩三氏とも、池はないものとして想定図に描かれ

ていない。

高橋和夫氏は、冬の町の庭は北向きであり、南に庭を作る余地はなかったとされている。

この町の庭は北向きだろうというのである。

西の町は、北面築き分けて、御藏町なり。隔の垣に松の木繁く、雪をもてあそはむたよりによせたり。(少女)

これが主景観であろう。この上、南に庭を作る余地はなかったと思う。

末沢明子氏も、冬の町に池がなかったとする。

冬の町に寝殿がないことが明石君の地位をあらわしているように、この場合は水も同様に考えられるのではないか。少女巻以外に冬の町の庭が見えないのは大堰の冬の重複を避けたとの見方が『源氏物語』の自然描写と庭園』で述べられたが、水がないことで他の町との落差が際立つ。直接にはこの町の置かれた地位を示しているだろう。

一方、中西立太氏は、明石の海辺を模した池を想定しておられる。

庭も太田案では枯山水としているが、私案では明石の海辺を模した池を設定してある。

『王朝文学文化歴史大事典』所収の『源氏物語』六条院平面図』において、倉田美氏も冬の町に池を配置しておられない。

このように、冬の町の池について「なし」とする説が多く、六条院想定図の冬の町に池を配しているのは、中西立太氏だけであった。

## 二 明石の御方の住まいの変遷

六条院冬の町は、明石の姫君の母の明石の御方の住まいである。明石の御方の住む町を、作者はどのように想定していたのであろうか。六条院冬の町の庭の紹介は、次のようである。

西の町は、北面築きわけて、御倉町なり。隔ての垣に松の木しげく、雪をもてあそばんたよりによせたり。冬のはじめの朝霜むすぶべき菊の籬、我は顔なる柞原、をさをさ名も知らぬ深山木どもの木深きなどを移し植多たり。(少女・③七九〜八〇)<sup>13</sup>

少女巻によれば、冬の町の北側に御倉町があるという。明石の御方の住まいは一町を占めていないのである。

このように、本文からは冬の町に池があったかどうかは分からない。しかし、明石の御方の住まいの変遷をたどることで、作者が特筆していない特徴が見出せるのではないだろうか。以下、順を追って検討してみよう。

明石の御方の住まいは、明石浜の館↓明石岡辺の宿↓大堰邸↓六条院冬の町と移り変わっている。はじめ明石の御方が明石の浜の館に住んでいたことは、明石巻の以下の本文から知られる。

高潮に怖ちて、このごろ、むすめなどは岡辺の宿に移して住ま

せければ、この浜の館に心やすくおはします。(明石・②三三四)

源氏が明石に来る以前には、明石の御方は浜の館に住んでいたが、高潮を恐れて岡辺の宿に移動している。浜の館は、海近くにある。

浜のさま、げにいと心ことなり。人しげう見ゆるのみなむ、御願ひに背きける。入道の領じめたる所どころ、海のつらにも山隠れにも、時々につけて、興をさかすべき渚の苦屋、行ひをして後の世のことを思ひすましつべき山水のつらに、いかめしき堂を建てて三昧を行ひ、この世の設けに、秋の田の実を刈り収め残りの齡積むべき稲の倉町どもなど、をりをり所につけたる見どころありてし集めたり。(明石・②三三三〜三三四)

明石の入道の領地には、堂が建ち、稲の倉町があり、人々が多く行き交っているという。賑やかな印象の地である。

のどやかなる夕月夜に、海の上曇りなく見えわたれるも、住み馴れたまひし古里の池水に思ひまがへられたまふに、言はむ方なく恋しきこと、いづ方となく行く方なき心地したまひて、ただ目の前に見やられるは淡路島なりけり。(明石・②三三九)

浜の館から源氏が眺めると、淡路島が見えるという。明石の御方も同様に見ていた景色である。明石の御方は、海辺近くで暮らしていたのである。

岡辺の宿は「造れるさま木深く、いたき所まさりて見どころある

住まひなり。」(明石・②二五五―二五六)と語られ、浜の館に比べてものさびしい風情の邸であったが、距離は近かった。それは、浜の館で源氏が弾いた琴の音が、波の音と一緒に聞こえてくることで分かる。

広陵といふ手あるかぎり弾き澄ましたまへるに、かの岡辺の家も、松の響き波の音にあひて、心ばせある若人は身にしみて思ふべかめり。  
(明石・②二四〇)

また、源氏が京へ戻る出立前に岡辺の宿を訪れた際、「波の声、秋の風にはなほ響きことなり。」(明石・②二六四)と語られており、この場面からも岡辺の宿に波の音が聞こえてくることが分かる。岡辺の宿は、浜の館のように海に面した邸ではないが、波の音が聞こえる距離に位置した邸なのである。

源氏が帰京したのち、明石の入道は、明石の君と姫君を移らせようと大堰邸の修築を始めた。大堰邸は、大堰川の近くにある。

昔、母君の御祖父、中務宮と聞こえけるが領じたまひける所、大堰川のわたりにありけるを、その御後はかばかしう相継ぐ人もなくて、年ごろ荒れまどふを思ひ出でて、かの時より伝はりて宿守のやうにてある人を呼びとりて語らふ。

(松風・②三九八)

源氏は、大堰邸の様子を惟光に見に行かせている。

惟光「あたりをかしうて、海づらに通ひたる所のさまになむは

べりける」と聞こゆれば、さやうの住まひによしなからずはありぬべし、と思す。  
(松風・②四〇一)

大堰邸は海辺に似通った風情であったことを惟光が報告すると、明石の御方が住むにはふさわしい場所であると源氏は考える。明石の御方の邸としてのあり様に気を配っている源氏の姿がある。

家のさまもおもしろうて、年ごろ経つる海づらにおぼえたれば、所かへたる心地もせず。昔のこと思ひ出でられて、あはれなること多かり。  
(松風・②四〇七)

明石の御方自身も、大堰邸を海辺の明石邸に似通った住まいだと感じる。

明石には、浜の館と岡辺の宿の二邸があった。大堰邸は、大堰川のはとりにあり、海の近くにあった明石と似ているという。源氏は、明石の御方が住まう邸に水辺の風情が必要だと思っている。

これら以外にも、大堰邸での明石の御方と水辺との結びつきを示す描写がある。

雪、霰がちに、心細さまさりて、あやしくさまさまにもの思ふべかりける身かな、とうち嘆きて、常よりもこの君を撫でつくろひつつ見あたり。雪かきくらし降りつもる朝、来し方行く末のこと残らず思ひつつけて、例はことに端近なる出でゐなどもせぬを、汀の水など見やりて、白き衣どものなよやかなるあまた着て、ながめあたる様体、頭つき、後手など、限りなき人

と聞こゆともかうこそはおはすらめと人々も見る。落つる涙をかき払ひて、<sup>明石</sup>「かやうならむ日、ましていかにおぼつかなからむ」とらうたげにうち嘆きて、

雪ふかみみ山の道は晴れずともなほふみかよへあと絶えずして

とのたまへば、乳母うち泣きて、

雪間なき吉野の山をたづねても心のかよふあと絶えめやはと言ひ慰む。  
(薄雲・②四三二〜四三三)

明石の姫君を手放して、紫の上に預けるべきか否か思い嘆くのは、大堰邸において、冬の池に張った水を見ながらであったと思われる。「汀」とは、「水際」の意である。水の際とあるだけでは、池か遣水かは判別できないが、始終水が流れている遣水は凍りつくことが少なく、池に張った水をながめていたのだろうと推測する。いつもは端近など出ない奥ゆかしい明石の御方である。凍った冬の池に、明石の御方の思いが重ねて表現されている。

以上のように、明石の御方の住まいには常に水辺があったことが住まいの変遷から確認できるのである。

### 三 冬の池を鑑賞する伝統からの想定

明石の御方と水辺との結びつきから、冬の町に池があった可能性が浮かぶ。少女巻において語られるように、この町は冬を鑑賞する

ように造られている。冬の池とは、どのような景物と捉えられているだろうか。

まず、『源氏物語』の他の場面では、どのように描かれているだろうか。二条院での冬の場面を挙げる。

雪のいたう降り積もりたる上に、今も散りつつ、松と竹とのけぢめをかしう見ゆる夕暮に、人の御容貌も光りまさりて見ゆ。

<sup>源氏</sup>「時々につけても、人の心をうつすめる花紅葉の盛りよりも、冬の夜の澄める月に雪の光りあひたる空こそ、あやしう色なきものの身にしみて、この世の外のことまで思ひ流され、おもしろさもあはれさも残らぬをりなれ。すさまじき例に言ひおきけむ人の心浅さよ」とて、御簾捲き上げさせたまふ。月は隈なくさし出でて、ひとつ色に見え渡されたるに、しをれたる前栽のかげ心苦しう、遣水もいたうむせびて、池の水もえもいはずごきに、童べおろして雪まろばしせさせたまふ。

(朝顔・②四九〇〜四九二)

月と冬の池が描かれ、子供たちに雪遊びをさせている。花紅葉の盛りよりも冬の夜の澄んだ月に雪が映えあっている、そんな空こそよいと源氏は言う。

『紫式部日記』において、作者紫式部は、内裏に戻る予定の中宮彰子の土御門殿滞在の間に雪が降ってほしいと願っている。

おまへの池に、水鳥どもの日々に多くなりゆくを見つつ、「入

らせたまはぬ前に雪降らなむ。このおまへの有様いかにをかしからむ」と思ふに、あからさまにまかでたるほど、二日ばかりありても雪は降るものか。見どころもなきふるさとの木だちを見るにも、ものむつかしう思ひ乱れて。(九〇頁)

土御門殿の池に水鳥が多くなっていくのを見つつ、雪が降ることを願っていたが、紫式部が自邸に戻っている間に雪が降ってしまった。自邸の庭を前に、思い乱れている紫式部の姿がある。池と雪とを鑑賞する日常があったことが窺える。

また、和歌にも冬の池は詠まれた。八代集、冬の部より抜粹する。

題しらず 読人しらず

おほぞらの月のひかりしきよければ影見し水ぞまづこほりける

(古今集卷六・冬歌・三二六)

題しらず

よみ人も

冬のいけの鴨のうはげにをくしものきえて物思ふころにもある

かな (後撰集卷八・冬歌・四六〇)

廉義公家障子

もとすけ

冬の夜の池の氷のさやけきは月の光のみがくなりけり

(拾遺集卷四・冬・二四〇)

題しらず

よみ人しらず

ふゆの池のうへは水にとぢられていかでか月のそこに入るらん

(拾遺集卷四・冬・二四一)

遍照寺にて、池辺雪といへる心をよみ侍りける

二品法親王

浪かけばみぎはの雪もきえなまし心ありてもこほる池かな

(千載集卷六・冬歌・四五六)

守覚法親王、五十首歌よませ侍りけるに

皇太后宮大夫俊成

ひとり見る池のこほりにすむ月のやがて袖にもうつりぬるかな

(新古今集卷六・冬歌・六四〇)

和歌においても、冬の凍った池に映る月が詠まれており、冬を越す鳥に心情を重ねる歌が見受けられる。また、春を待つ心が詠まれている歌もある。冬の池を鑑賞する伝統があったのである。

#### 四 池はあったか

これまで、六条院冬の町の池の有無について考察した。

冬の町の女主人明石の御方は、六条院に入る前は海辺や川辺などの水辺近くに暮らしていたのであり、明石の御方の心情は冬の池とともに語られることがあった。明石の御方の邸の水辺の風情について、源氏が配慮していることも確認した。冬の池は雪や月の光とともに鑑賞されることが多いことが、和歌や朝顔巻の二条院での源氏の発言から窺うことができる。冬の風情をより味わうために造られた冬の町に、紫式部が月の光の映る池を想定していないことがあ

るだろうか。六条院冬の町には月の光が映る池が配されていたと考  
える。

もし、太田静六氏の説のように「枯山水」<sup>⑮</sup>の庭だとしたら、その  
ように特筆したのではないか。また、もし明石の御方の邸に池がな  
かったのだとしたら、そう書かれたのではないか。たとえば『榮花  
物語』には、三条院に池がなかった旨が記述されている。

さてほとんどなく、宮の御前も三条院に渡らせたまひぬ。院の  
様、わざと池、遣水なけれど、大木ども多くて、木立をかしう  
気高く、なべてならぬ様したり。

(巻第十二たまのむらぎく・②八四)<sup>⑯</sup>

明石の浦に暮らした明石の御方には水辺との連想が働き、読者は  
六条院冬の町に池があったと想像して物語を読んでいたのではない  
か。冬の町における池の描写がないという理由で以って池がないと  
考えるのは、物語の舞台としていかがであろうか。

邸宅の中に池を造る意味とは何だろうか。六条院のモデルと言わ  
れている河原院の例を見てみたい。河原院は、源融が六条の鴨川付  
近に建てた邸である。『伊勢物語』や『今昔物語集』などに語られ  
ている。

むかし、左のおほいまうちぎみいまそがりけり。賀茂河のは  
とりに、六条わたりに、家をいとおもしろく造りて、すみたま  
ひけり。十月のつごもりがた、菊の花うつろひさかりなるに、

もみちのちぐさに見ゆるをり、親王たちおはしまさせて、夜ひ  
と夜、酒飲みし遊びて、夜明けもてゆくほどに、この殿のおも  
しろぎをほむる歌よむ。そこにありけるかたみおきな、板敷の  
したにはひ歩いて、人にみなよませはててよめる。

塩竈にいつか来にけむ朝なぎに釣する船はここによらなむ  
となむよみけるは。陸奥の国にいきたりけるに、あやしくおも  
しろき所々多かりけり。わがみかど六十余国の中に、塩竈とい  
ふ所に似たる所なかりけり。さればなむ、かのおきな、さらに  
ここをめでて、塩竈にいつか来にけむとよめりける。

(『伊勢物語』八十一段)<sup>⑰</sup>

今昔、川原ノ院ハ融ノ左大臣ノ造テ住給ケル家ナリ。陸奥ノ  
国ノ塩竈ノ形ヲ造テ、潮ノ水ヲ汲入テ池ニ湛ヘタリケリ。

(『今昔物語集』巻第二十七―二・⑤九五)<sup>⑱</sup>

この邸には、陸奥の国の塩釜の浦を模した池があったという。河  
原院の池は、海に見立てられているのである。

第二節で見た通り、明石から海を眺めていた源氏は、「古里の池水」  
を思い出す。「古里の池水」とは桐壺の更衣の里であり、源氏が自  
邸としていた二条院の池を指すのであろう。海辺の景色が庭の池を  
想起させている。また、瀬戸内に浮かぶ淡路島は庭の池の中島に似  
通っているとも語られる。

庭における池が海に見立てられていたのだとすると、海の近くに

生まれ育った明石の御方の町の庭に池があったと読むほうが自然ではないだろうか。

## 五 対の配置の想定

では、図を作成して六条院冬の町に池を配置することができかどうかを考えていきたい。冬の町想定配置図私案を作成するために、以下、建物の配置について考察していく。

二月ばかりより、あやしく御気色かはりてなやみたまふに御心ども騒ぐべし。陰陽師どもも、所をかへてつしみたまふべく申しければ、外のさし離れたらむはおぼつかなしとて、かの明石の御町の中の対に渡したてまつりたまふ。こなたはただ大きなる対二つ、廊どもなむ廻りてありけるに、御修法の壇ひまなく塗りて、いみじき験者ども集ひてのしる。

(若菜上・④一〇三)

明石の御方の娘である明石の姫君は、東宮に入内し女御となった。お産の場を冬の町に設けることになったのである。冬の町は「大きなる対二つ」があると語られ、寝殿の記述はない。玉上琢彌氏は「この御殿は寝殿がなく、大きな対屋が二つだけ並び、渡り廊下がめぐらされていた。」とされ、池浩三氏も、「寝殿を設けず、大きな対が2つあった。」とされている。高橋和夫氏は二つの対を違う向きに並べられており、中西立太氏は二つの対を並べ背後に中の対を設

けている。二つの対がどう配置されていたのが問題となっている。建物の並べ方として適当なのは、どんな形態であろうか。

平安京の一町規模の遺構、前出「右京一条三坊九町」の建物は、コの字型配列であると報告されている。また、川本重雄氏は、「中庭によって採光や通風を確保できる」とし、コの字型建物配置が古くから発展していたことを指摘する。コの字を形成するように、建物を平・妻（長手方向・短手方向）互い違いに配置し、日光や風を取り入れやすくした形である。これらの報告に従い、建物を採光や通風を確保しやすい配置とし、想定配置図私案に示す。この配置にすれば、対二つを同じ向きに並べる配置よりも、池の面積が取りやすくなるのではないだろうか。

次に、対の形態について見ていきたい。川本重雄氏は、対の規模・形態について三形式を挙げておられる。

(1) 対 梁行二間の母屋に四面庇・南広庇・寝殿と反対側の

孫庇を備えた対。

(2) 対代 (1)で述べた対の規格に合わないもの。

(3) 対代廊 対代のうち母屋梁行一間のもの。

冬の町には「大きなる対二つ」（若菜上・④一〇三）があると述べられているので、三形式のうち、最も規模の大きな(1)の対が二つあることとして想定配置図私案に示した。

また、高橋和夫氏は、冬の町の庭は北向きであり、南に庭を作る

余地はなかったとの見解である<sup>(26)</sup>。平安時代の貴族住宅の特徴として「宅地南側に池を伴う庭のあること」が山岸常人氏の論文で指摘されている<sup>(27)</sup>。が、一方で庭園研究の仲隆裕氏は、「寝殿の南に池を備える形が寝殿造の特徴である」という考えは必ずしもあてはまらないように思われる。」とされている。冬の町は、儀式を行う目的で造られた庭ではないという特徴があるが、今回は従来言われている、南に池がある形で想定配置図私案に加える。北向きの庭については、今後の研究を待ちたい。

## おわりに

本論では、六条院冬の町に池があったかについて考察した。池を配置する面積が取れるか検討するため、建物配置についても考察し、想定配置図私案を作成した。

冬の町には御倉町があるため一町より狭いが、池を配置できないのだろうか。御倉町の面積をどれくらい取るのかはさらなる検討が必要だが、先行想定図を参考にし、一町のうち仮に御倉町を三分の一取った<sup>(28)</sup>として、残りの三分の二を狭い面積だと言えるのだろうか。平安京の宅地配分について、「三位以上は一町以下、五位以上は半町以下、六位以下は四分の一」が標準であったことが推定されている<sup>(29)</sup>。一町の三分の二は決して狭い面積ではない。現に、図に配置してみると、池の面積は十分に取れ、約六百平方メートルであった。

面積の大小はあろうが、冬の町に池を配置することはできる。よって、冬の町の想定配置図私案に池を配置する。

今後は、冬の町の姿について、池の有無以外の観点からの検討をも加え、想定配置図私案の更新に反映させていきたい。

## 注

- (1) 平良泰久氏「平安貴族の邸宅跡 平安京右京一条三坊九町」《月刊文化財》二四二、第一法規出版、一九八三年。
- (2) 仲隆裕氏「平安京の庭園遺構」《杉山信三先生米寿記念論集 平安京歴史研究》杉山信三先生米寿記念論集刊行会、一九九三年。
- (3) 六条院についての先行論をまとめたものに、浅尾広良氏「『源氏物語』の邸宅と六条院復元の論争点」(倉田実氏編『王朝文字と建築・庭園(平安文学と隣接語学)』二〇〇七年、竹林舎)がある。
- (4) 外山英策氏「源氏物語の自然描写と庭園」(丁字屋書店、一九四三年)。日向一雅氏監修『源氏物語研究叢書』第八巻(クレヌ出版、一九九七年)に復刻。
- (5) 太田静六氏「寝殿造の研究」(吉川弘文館、一九八七年)。
- (6) 福岡女子大学国文学科三年「六条院想定図」《香椎鴻》第一一号、一九六六年。
- (7) 玉上琢彌氏の「六条院推定復元図」の研究は、「六条院推定復元図并考証」《大谷女子大国文》一四、一九八四年、「六条院」《平安京の邸第》所収、望楼社、一九八七年、「光源氏六条院の考証復元」《季刊大林》三四、大林組、一九九一年、「六条院復元図覆考」《源氏物語講座一 源氏物語とはなにか》勉誠社、一九九一年、「六条院復原図作成顛末略記」《むらさき》二八、一九九一年、「光る源氏の六条院について」《中古文学》

五〇、一九九二年、「源氏物語の建築 付六条院推定復元図」(柳井滋氏・室伏信助氏ほか校注)『新日本古典文学大系 源氏物語』、『月報』岩波書店、一九九三年、「光る源氏の六条院復元案・第二案」(『歴史文化研究』源氏物語と平安京)おうふう、一九九四年)がある。

- (8) 池浩三氏の「六条院想定図」の研究は、『源氏物語―その住まいの世界―』(中央公論美術出版、一九八九年)、「源氏物語の六条院―その想定平面図の根拠―」(『歴史文化研究』源氏物語と平安京)おうふう、一九九四年、「源氏物語の住まい」(五島邦治氏監修、風俗博物館編『源氏物語六条院の生活』光琳社出版、一九九八年)、「源氏物語における「建築」(鈴木一雄氏監修『国文学解釈と鑑賞 別冊 源氏物語の鑑賞基礎知識 一七空蟬』(至文堂、二〇〇一年)がある。

(9) 高橋和夫氏「六条院の造営―少女」(『国文学』第三二卷第一三号、學燈社、一九八七年)。

(10) 末沢明子氏「水辺の追憶…『源氏物語』の庭園」(『福岡女学院大学紀要 人文学部編』一〇号、二〇〇〇年)。

(11) 中西立太氏「六条院復元」(『源氏研究』第六号、翰林書房、二〇〇一年)。  
ほかに「六条院 想定復元画について」(伊井春樹氏監修『講座源氏物語研究 第一巻 源氏物語の研究の現在』おうふう、二〇〇六年)がある。

(12) 倉田実氏「源氏物語」六条院平面図」(小町谷照彦氏・倉田実氏編著『王朝文学文化歴史大事典』笠間書院、二〇一二年)。

(13) 『源氏物語』本文の引用は、阿部秋生氏・秋山虔氏ほか校注・訳『新編日本古典文学全集 源氏物語①』⑥(小学館、一九九四―一九九八年)により、巻名、頁数を示す。私に傍線を付した。以下同じ。

(14) 引用は、小谷野純一氏『原文&現代語訳シリーズ 紫式部日記』(笠間書院、二〇一三年)による。

(15) 和歌の引用は、『新編国歌大観 CD-ROM 版 Ver.2』(角川学芸出版、二

〇〇三年)により、歌番号を付す。

(16) 注(5)に既出。

(17) 山中裕氏・秋山虔氏ほか校注・訳『新編日本古典文学全集 栄花物語②』(小学館、一九九七年)により、巻名、頁数を示す。私に傍線を付した。

(18) 片桐洋一氏・福井貞助氏ほか校注・訳『新編日本古典文学全集 竹取物語 伊勢物語 大和物語 平中物語』(小学館、一九九四年)。

(19) 森正人氏校注『新日本古典文学大系 今昔物語集⑤』(岩波書店、一九九六年)により、巻、頁数を示す。

(20) 玉上琢彌氏「光源氏六条院の考証復元」注(7)に既出。

(21) 池浩三氏「源氏物語の住まい」注(8)に既出。

(22) 「中の対」について、阿部秋生氏・秋山虔氏ほか校注『日本古典文学全集 源氏物語四』(小学館、一九七四年)の頭注は、「中の対」は不審。

下文によれば、明石の君の対は二つあるという。寝殿があるか否かも明らかでない。これを、中央の対、すなわち北の対とする説、また、二つのうちの対とよばれているほうとする説がある。」としている。山岸徳平氏校注『日本古典文学大系 源氏物語三』(岩波書店、一九六一年)の頭注は、「寝殿がなく、大きな対の屋が、只二つで、渡り廊下が、いかにも、二つの対を廻るようにしてあるのだった、その所(中の対)に。二つの対は、北の対と、その又北にある対であろう。」としている。柳井滋氏・室伏信助氏ほか校注『新日本古典文学大系 源氏物語三』(岩波書店、一九九五年)では、「こちらの町は、(寝殿はなくて)ただ大きな対の屋が二つあって、いくつかの廊が周囲をめぐっているが、「中の対」は不詳。二番目の対の意とも。」としている。テキストとしている『新編日本古典文学全集』の頭注は、「下文によれば、西北の町は、寝殿はなくて、対屋のみ二棟ある。「中の対」が、そのいずれであるか、位置関係とともに不明。」としている。

- (23) 注(1)に既出。
- (24) 川本重雄氏「貴族住宅」(小泉和子氏ほか編『絵巻物の建築を読む』東京大学出版会、一九九六年)。
- (25) 川本重雄氏『寢殿造の空間と儀式』(中央公論美術出版、二〇〇五年)。
- (26) 注(9)に既出。
- (27) 山岸常人氏「宅地と住宅」(『季刊考古学』特集古代の都城 飛鳥から平安京まで)『第二号、雄山閣、一九八八年)。
- (28) 注(2)に既出。
- (29) 秋の町を一町の邸宅とし、冬の町との間にある小路四丈(12m)を冬の町に加え、御倉町の面積に充てるものとする。
- (30) 秋山國三氏「平安京における宅地配分と班田制」(『京都「町」の研究』法政大学出版局、一九七五年)。

— かつとう・のぶえ、広島大学大学院博士課程後期在学 —

